

全校朝会「あれから76年」3/1

『またあしたあそぼうね』（新日本出版社、文：山下 ますみ、絵：ささき みお）という絵本を紹介します。昔、日本が戦争をしていた時のお話です。76年前の3月10日、東京にたくさんの爆弾が落とされ、町中が焼け野原になって、たくさんの尊い命が失われました。

治代ちゃんは、八歳。お隣に、同じ年の正雄ちゃんという子が住んでいます。その日も正雄ちゃんたちと、戦争ごっこに夢中になっていました。正雄ちゃんは、両手を上げて飛行機の真似を始めました。夕方になり、お母さんが迎えに来ました。「またあした遊ぼうね」「またあした」治代ちゃんは、みんなに手を振りました。その夜、「起きろ！」という声で目が覚めました。空には幾つもの飛行機が、屋根の上を飛んでいるように見えます。お母さんの手をぎゅっと握ると、家の前に穴を掘って屋根を付けた防空壕に向かいました。その時、防火水槽の上に正雄ちゃんが見えました。空襲で火事になったら逃げずに火を消さなければならない、と教えられていました。治代ちゃんは、お母さんに引っ張られるように、防空壕に入りました。しばらくすると、防空壕の外が騒がしくなりました。子供の名前を呼ぶひきつったような声。バシーンバシーンと何かがぶつかっては破裂する音。治代ちゃんは、怖くて耳を塞ぎました。

防空壕から出ると、町の様子は、まったく変わっていました。空から爆弾がヒュルヒュルと音を立てて雨のように降ってきます。道路は、逃げていく人たちで埋め尽くされています。手を引かれた子供が転びました。道は、火の川となっています。子供は、たちまち火の川に飲み込まれてしまいました。たくさんの荷物を積んだ馬が来ました。荷物が燃えています。火は、尻尾を伝って馬の体に燃え移り始めました。土手の枯れ草にも火が迫ってきたので、しっかり手をつないで土手を駆け下りました。防空頭巾に触れました。火が着いていたのです。気が付くと治代ちゃんはお父さんとはぐれていました。その時、誰かに腕をつかまれました。お腹をえぐるような爆弾の落ちる音、破裂する音。人々の叫び声、逃げ惑う声。気が遠くなっていきます。

夜が明けて火が収まったころ、治代ちゃんは何かから引きずり出されました。治代ちゃんは周りに目をやりました。黒い塊の山。よく見ると、それは人でした。たくさんの人たちが折り重なっています。誰もぴくりともしません。目の前には、霞のような煙のようなものが漂うばかり。あったはずのたくさんの家々も何もありません。治代ちゃんの家は、無事でした。けれど、それからしばらくたっても、友達には誰にも会えませんでした。それからもう長い長い時間が経ってしまいました。今でも夕焼けを見るたびに、「また明日遊ぼうね」と友達と言い交した声が聞こえてくるような気がするのです。

明日も会えるはずのお友達と会えなくなった。とても怖くて悲しいお話でした。これが戦争です。みなさんには「暴力やいじめは絶対に許さない」といつもお話ししていますが、暴力やいじめの先にあるのが、国と国との戦争です。二度と戦争はしたくないですね。明日から、アキシマエンシスで「東京空襲資料展」を開催するそうです。戦争について考える機会になればと思います。

